

気仙沼プロジェクト9月10日～15日 活動報告

1、参加大学

東北学院大学・麗澤大学・明治学院大学・名古屋学院大学・西南学院大学（初日参加学生32名、活動途中早退・加入する学生が数名いたため変動があります。）

2、活動内容

写真洗浄、瓦礫撤去、リアスアーク美術館での古美術品修復、アンカー作り、生活班に分かれての活動でした。時間の空きを見て、気仙沼周辺・陸前高田・南三陸町を視察させていただきました。作業内容については前クールと重なるところがありますので割愛させていただきます。

3、この活動を通じて感じたこと

9月10日～15日までの第九クールの活動には、明治学院大学から9名の学生が参加いたしました。各メンバーがこのプロジェクトを通して多くのことを感じ、考えました。活動から帰ってきて、自分の思いを言葉にすることがなかなか難しく時間がかかってしまいました。各々が素直な気持ちを記しています。読んでいただいた方に、私たちの思いが少しでも伝われば幸いです。

以下、学生の感想になります。

一人の人間として、一日本人として、一学生として被災地に自分は何が出来るかということを実際に被災地を訪れ考えてみたくて今回のプロジェクトに参加しました。

結論から言うと多くの方が言うように、私に出来ることは本当に微々たることで、私がいようがいまいが被災地の復旧にはなんの役にもたちそうにないということを突きつけられました。

また、被災地を自分の目で見て感じた時、何とも言えない苦しさで胸が押し潰されるような思いにかられるのだろうと思っていましたが、実際に訪れてみると意外にも客観的に冷静に被災地を見ている自分がいました。

その場の空気や現地の方の表情ひとつを敏感に受け止めて涙する人とわたし。私は涙ひとつこぼれませんでした。

何が言いたいかって言うと、被災地と私は交われませんでした。家族や友達、故郷を失くした悲しみは私の想像を越えていて、まっさらな何もない更地は私には原っぱにさえ見えた時、自分にとって被災地はやっぱり他人事でしかないのだということを実感せざるをえませんでした。

同じような目線で物事を捉えるのは難しい。同じ気持ちになることはできない。でも、それでもまた行きたいと思うのは絶対に交わることのない二者で終わりたいからなのだ

と思います。

交わることはなくても少しでも近づけたら。全く他人事であってもひとごとで終わらせたくないです。

たくさんの人との出会い、被災地について考える契機を与えてくれた今回のプロジェクトに関わった方々に深く感謝します。

社会学部 宮澤

3. 11の後、連日報道されている被災地の現状や頑張っている被災者のことをテレビで見ているだけしか出来ない自分が嫌になり、何か力になれることはないかと考えていた時に今回のボランティアの募集を見つけ応募をしたのが始まりでした。

現地に向かうまでは、私に何ができるのだろうと不安に思っていました。実際に作業をしているうちにそんな思いは消えていました。それはきっと自分のできることに対し精一杯取り組んでいたからだと思います。こういうと自己満のように聞こえてしまうかもしれませんが、無理をせず自分のできる範囲のことをしっかりと取り組むことがボランティアを行ううえで大切なことなのかなと気がつくことができました。

気仙沼で偶然会った地元の方が「本当はきれいな町だから、もっときれいになったらまた来てね」と声をかけてくださいました。まだまだ復興には時間と人手がかかりますが、いつかきれいな町を見に行けることができるように、今後も被災地に関心を持ち続け、何らかの形で復興に携わっていきたいと思います。

社会学部 田宮

私は、今回のボランティアでたくさんの人と出会いました。そして、今まで見たことのない景色と感じたことのない空気に、悲しみに似ているけれど言葉では表せない感情を抱きました。

例えば、メディアを通して見てきた被災地や津波の映像から感じた恐怖と、実際に自分の足で歩いて目で見て感じた恐怖は全く違う。被災地を歩いて自分の目線で津波の被害を見ると、自分の身長よりもはるかに高い津波が目に見え、想像しただけで言葉がでないくらい怖くなりました。

また、瓦礫撤去作業では、1つの作業の始まりと終わりを体験しました。家などがあつた場所の瓦礫を撤去する。撤去していくにつれて、本当に何もなくなってしまったことを実感する。作業が終わったことへの達成感。次の段階への最初の一步を踏み出したという嬉しさ。何もなくなつたことへの寂しさ。あの時は、これら3つの感情が入り交じり、少し複雑な気持ちになりました。

でも、被災地にはあるのは、このようなたくさんの悲しみや辛さだけではありませんでした。現地の人やボランティアにきている人の笑顔だったり、瓦礫の中に咲く小さな花だったり、蒼く澄んだ空だったり。たくさんの悲しみの中にも、心安らぐものはたくさんあったのです。きっと、悲しくて辛くてどうしようもなくなった時、被災地の人、このような安らぎを力にして頑張っているのではと思いました。

今、被災地は復興に向けて少しずつ前に進んでいます。しかし、そうは言っても、震災以前の姿を取り戻すには長い時間がかかると改めて思ったし、瓦礫撤去の終わりが次の段階への最初の一步でもあるように、やらないやいけないことはまだまだたくさんあると思います。でも、たくさんの小さな力が集まれば、想像以上に大きな力になって、どんなことも乗り越えられると私は信じています。

最後に、今回のボランティアをサポートしてくれた人、一緒に活動した明学生や他大学生、FIWCやRQのみなさん、そして、私たちを温かく迎えてくれた唐桑地区の人。このボランティアでの全ての出会いに感謝です。また唐桑の地で会えたらいいなと思います。本当にありがとうございました。

そして…。被災地の1日でも早い復興を心から祈っています。

社会学部 四田

参加前、私自身も含め、周囲の人の被災地への関心が少しずつ薄れていることに気付きました。どれだけの惨劇であったのかはみんな知っているはずだし、復興には何年もかかると言われていたのに、たった半年でこんなにも忘れられてしまうのか、と少し疑問にも感じていました。実際に現地に赴いてみると、想像以上の光景が広がっていました。半年経ったとは思えない状況です。特に南三陸町を見たときの衝撃はきつとずっと忘れなれないと思います。何もなくなってしまった町を見て、衝撃を受けたのと同時に、自分の無力さも感じました。私はリアスアークに参加させて頂きましたが、その中で、「ボランティアは実際にいなくても変わらないかもしれない。いなくても復興はしていく。でも必要とされているんだよね。」という言葉が特に印象に残っています。リアスアークでは地元の被災された方々とコミュニケーションが取れる貴重な場でもあり、私たちはなるべく沢山お話出来るよう、心掛けました。そこでボランティアの役目は言われたとおりの作業が全てではないということに気付きました。地元の方との楽しいコミュニケーション、雰囲気作りなども、言われはしませんが、求められているものの一つであったのではないかな、と思いました。私がこの1週間でしたことは、ゼロに限りなく近いものだったかもしれません。でも、「ボランティアはいてもいなくても変わらない。でも、いて良かった。」そう思って貰えるような支援を意識して今後も活動を続けていきたいです。

被災地で活動することが全てではないかもしれませんが、一人でも多くの人に自分の目で被災地を見に行つて欲しいと感じました。私は実際に現地に行く事で、震災を忘れてはいけない、そう強く感じる事が出来ました。無関心が一番怖いことだと思います。まず

は周りの人にこの一週間の貴重な経験を伝えることから始めます。関わって下さった多くの方々に心から感謝します。ありがとうございました。

社会学部 宮本

自分がこのプロジェクトに参加したのは被災地の人の役に立ちたいという気持ちももちろんありましたが、自分にとって何かプラスになることがあるのではないかという思いからでした。実際、メディアなどではわからない現地の様子が見れたり、瓦礫撤去や写真洗浄の作業をする中で他大学や他のボランティア団体、地元の方など色々な人と交流ができ、たくさんのかんじたり考えさせられました。これらのことは自分にとって本当にいい体験となったと思います。

特に印象に残っているのは写真洗浄の作業です。プライバシーの侵害かな？と思いつつも作業中写真を見ていると、ところどころ切れながらも結婚式や旅行や子供の写真など幸せそうな姿が写っていて、なんとなく、言葉にならない悲しい気持ちになったりもしました。でも作業の休憩中にぶらぶらしていたら自分の写真を見つけた人がいて、その人がすごい喜んでいたので見て、地味だけれど確かに意味のある作業なんだということを実感できました。

ただ、ボランティアの最中も終わってからもずっと心に残っているのが、自分にとっていい経験になった、ということだけで満足して終わりにしてはいけないという気持ちです。というのも初日に被災した現場を見せてもらった時にまだこんなに瓦礫や壊れた建物があるのかとショックを受け、これから自分たちが帰った後もまだまだボランティアや支援が必要なのだと感じたからです。また、「忘れられるのが一番怖い」と地元の方が仰っていたのも印象に残っています。

これから先どんな形や規模であれ、自分のできることを探し支援を継続していきたいと思っています。今はまず、被災地の現状や自分が感じたことを周りの人達に伝えることから始めようかなと思います。そして時間があったらボランティアとしてでも個人的にでもいいので、また気仙沼に行きたいなと思いました。

最後になりましたがこのような機会を作ってくれた方々と一緒に過ごした第9クルールの皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

経済学部 筒井

今回このボランティアに行きって思ったことは、この活動を一回で終わらせてはいけないということだ。

現地で活動している時は一生懸命で、多くのかんの役に立とうと頑張ってきた。結果的に多くの出会いや発見、勉強につながって行った。様々な大学・地域からメンバーが集まり、十人十色な思いでこのボランティアに参加していて、そしてFIWCやRQなどの人達とも出会え、多くの熱い思いや考えを聞けて人としても少し前進できたように思う。

しかし帰ってきてみると、その達成感から、多くの人に「ボランティアに行ってすごい良かったよ」、「お前も一回行ってきな」などと偉そうな事ばかり口に出して、たった一週間の活動で満足し、自惚れていた自分がいた。

今回の震災での復興期間は計り知れない。そのため、今回のボランティアで終わらずに様々な形で支援を行いつけていきたいと思う。

最後に今回の活動に関わった全ての人に感謝とお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

社会学部 座間

今回私が気仙沼に行こうと思ったきっかけはボランティアの数がどんどん減ってきている現状に何か力になりたいと思ったことと、被災地をこの目で見てみたかったということでした。

実際行って見て被災地の悲惨な瓦礫の山などには言葉もでなかったし、特に陸前高田は大震災前後の街の変わりようにすごくショックを受けました。

でも現地の人達はすごく明るくて優しくしてくれました。

やはり唐桑は高齢者の方が多い町なので私達若者と会話するのを楽しんでいる方が多かったように思えました。

そんな中で特に私が忘れられないのは瓦礫撤去現場の依頼主の方に

「大震災がなければ唐桑にこんなに大勢の若者が来てくれる事なんて絶対になかった。ボランティアの皆さんのおかげで復興の能率が上がったのはもちろんですけどすごく町に活気がでた。ありがとう。」

と言われたことです。

正直一週間も満たないボランティア期間でどれだけの力になれるんだろうと不安でしたが「来てくれることだけで嬉しい」

と言われたことで、私自身来たかいたがよかったなと思えたのでよかったです。

復興に向かって頑張っている町なので必ず唐桑は復興すると思います。

そしてまた機会を見つけてもう一度復興した唐桑を見に行こうと思います。

社会学部 駒形

私は、被災地で実際に瓦礫の山、4階まで津波が来て部屋の中のもの何が残っていないアパート、家があった場所が田んぼのようになって跡形もない場所など、さまざまな状況の場所を見ました。その光景を見るたびに、普段の感覚が分からなくなるというか、寂しい、悲しいでは言葉で伝えきれないような、何とも言えない気持ちになりました。今まで半年間、被災地の様子をテレビや新聞で見てきたけれど、本当にこれが現実起こったことなのだというのを、実際に被災地に行って感じました。

また、私はこの数日間で、たくさんの気仙沼の方々と話す機会を持ちました。泊ませ

ていただいた体育館の近くのローソンに行くときには、近所の方が声をかけてくれ、10分くらい立ち話をしたこともありました。リアスアーク美術館での活動では、そこで働いている方々と、4日間一緒に活動し、とても仲良くなることができました。皆さんと話した内容は、気仙沼の歴史、津波の状況、今の生活、趣味、などです。話を聞けば聞くほど、気仙沼という土地が、皆さんにとってとても大事な場所であるのだということが分かりました。明るく元気に私たちに接してくれているのですが、震災の話の中でみせる、悲しそうな表情は、とても印象的でした。軽はずみなことは言えない。そう思い、相手の気持ちを考えながら一言一言話しました。

ボランティアをしに集まった仲間との共同生活においては、ミーティングなどを通して、皆がボランティアをしようと思った理由や、ボランティアに対する考え方はさまざまだけれど、「現地の人々の力になりたい」、「復興を願っている」、という部分は、皆に共通する思いだったのではないかと感じました。私たちのその思いと、現地の人々のボランティアへのニーズがあったとき、本当に意味のある活動であったと言えるのだと思いました。そうであるから、ボランティアは、活動をする中で、できる限り現地の人々の話や、他のボランティア団体の方の話聞き、現地の文化について学び、馴染もうとする努力をしながら活動を行なっていかなければならないのだということを感じました。

最後に、私は、このボランティア活動を通して、明治学院大学、他大学のみなさんととても仲良くなることができました。本当にすてきな人ばかりでした。会ったばかりなのにずっと前から友だちだったかのように思えます。充実した毎日だったなあ。と感じます。第9クールの皆さんに、とても感謝しています。そして気仙沼で出会った方々とも、たくさんの思い出ができました。また皆と気仙沼に行きたいと感じます。次にボランティアに行くとき、私は、気仙沼に行くというよりは、気仙沼に帰るというような気分でボランティアに向かうのだらうと思います。大好きな気仙沼の復興を、これからもお手伝いしたいと思います。

社会学部 後藤

ボランティアから帰ってきて、「今、行けてよかった」と気仙沼での日々を思い出しています。3月11日に震災が起きてから、もどかしい気持ちでいっぱいでした。日本で身近に起こっていることなのにも関わらず、なぜか心は遠く離れている気がしていました。テレビの向こうでは被災された方の思いや願いがたくさんあるのに、それを受け取ってもどうすることもできない。津波の様子・瓦礫の山・変わり果てた土地を見ても、どうすればいいかわからない。受け取り続けるだけで、自分の中にどんどん溜まって行って、何もしていない自分が悔しくて情けなくなっていました。そんな時、大学からのボランティアの募集がかり、今行くしかない！と参加しました。

現地にいくまで、被災地と自分の間には必ず何か仲介していて、それを通してでしか情報を知ることができていませんでした。映画を見ているような感覚で、自分の生活と被

災地の生活がリンクできずにいました。今回、気仙沼・陸前高田・南三陸町と視察に連れて行っていただき、自分の目で見て、空気を感じて、人に会って、ようやく震災と等身大で向き合えた気がします。

初日から二日間参加した写真洗浄の作業では、高井さんの「写真を綺麗にすることが復興につながるかもしれない。でも少なからず写真を求めている人はいる。心の癒しになれば。」という言葉が忘れられません。この写真一枚一枚にたくさんの思いが込められていると想像すると、胸が一杯になりました。この人たちが無事であってほしい、そしてまたこの写真を見て笑顔になってほしい、そんなことを願いながら作業をしていました。

残りの4日間リアスアークで作業させていただいて、ずっと前からここで作業していたかなと錯覚するくらい皆さんという空間が心地よかったです。庄司さんが作ってくださった毎日のお弁当が本当に楽しみで、美味しく、4人で感謝しながらいただきました。作業の合間に、震災の話をする時は戸惑いました。どう声をかければいいのか、どこまで聞いていいのかと悩みました。けれど、私が想像していた以上に前を向いています。やるしかない！自分たちが動かなきゃ！と私たちの前では明るく振舞ってくださいました。「震災が起きて悪いことばかり起きているわけじゃないのよ。こうやって学生さんが気仙沼に来てくれて、あなたたちに出会えて嬉しいの。」と言われた時は目頭が熱くなりました。別れ際も皆さんと握手をして、もっと一緒にいたくて、寂しかったです。でも、また次の再会を楽しみに、私自身これから頑張るための力をたくさんいただきました。

まだまだ復興への道のりは長いですが、しかし、気仙沼に行って今まで交わることがなかった人たちとの出会いがあり、大切な人たちがたくさんできました。この人たちのために支えになりたいと心から思いました。5泊6日と短い期間でしたが、私は絶対忘れません。これからもずっとつながってほしい、そして復興まで支えていきます。一人ひとり小さい力かもしれないけれど、無力ではありません。自分にできることを続けていけば、きっと何かが変わります。

今回のボランティアで出会えた皆さん、本当に感謝いたします。ありがとうございました。そして、これからもよろしく願いいたします。

社会学部 玉井